

比較対応の幻想

——ギリシア語 $-\mu\acute{\alpha}\nu$, ヒッタイト語 $-(h)ḥaḥat(i)$, リュキア語 $-\chi ag\acute{\alpha}$ ——

吉田和彦

京都大学

【要旨】 ギリシア語 $-\mu\acute{\alpha}\nu$, ヒッタイト語 $-(h)ḥaḥat(i)$, リュキア語 $-\chi ag\acute{\alpha}$ という 1 人称単数中・受動態過去語尾は一見したところ規則的に対応し、基本語尾 $*-h_2e$ が反復した $*-h_2eh_2e$ という祖形に遡るように思える。しかしながら、これらの 3 つはそれぞれの言語内部の歴史のなかで二次的につくられた形式である。その理由はつぎのとおりである。基本語尾 $*-h_2e$ が反復される形態変化は後期ヒッタイト語の時期に顕著にみられるが、反復語尾だけでなく非反復語尾も存続しており、両者のあいだには機能的差異がない。もし印欧祖語やアナトリア祖語の時期に反復語尾がつくられていたと想定するなら、数千年もしくは 1 千年以上にわたって反復語尾と非反復語尾が自由変異の関係にあったことになる。このようなきわめて進行速度の遅い言語変化を考えることはできない。比較方法が祖語の再建という目標に向けてもっとも有効な方法であることはいうまでもない。しかし、同時にその限界を認識することは重要である*。

キーワード: 比較対応, 音法則, ギリシア語, リュキア語, ヒッタイト語

1. はじめに

祖語を再建する目的は、祖語とそこから分岐した諸言語の歴史時代のあいだの言語史の空白を復元し、記述言語学的には不規則としか説明できない形式にも合理的な理解を与えることにある。この目的を達成するために用いられるもっとも実質的な言語学的方法は、比較方法である。比較方法によって得られる成果は、現実の歴史的資料と記録以前の言語とのあいだの時期に生じたと推定される音法則の提示というかたちで示される。そして音法則が導き出される基礎となるのは、分派諸言語の同源形式のあいだにみられる比較対応であることはいうまでもない。フランスの印欧学者 Antoine Meillet (1937: 30) は、その古典的著作のなかで、「対応が同一言

* 本論文の内容は、『言語研究』に投稿した後、2011年4月9日に開催された京都大学言語学懇話会第85回例会において発表した。発表後に吉田豊、西村周浩、Adam Catt、児玉茂昭各氏からいただいた質問・コメントは、最終原稿を作成するうえで有益であった。本論文の一部は、第7回国際ヒッタイト学会議（トルコ共和国チョルム市、2008年8月）と The 21st Annual UCLA Indo-European Conference (2009年9月) においても発表した。これらの会議の参加者、とりわけ Craig Melchert 教授との意見交換からは学ぶことが多かった。また『言語研究』編集委員会の査読者からいただいたコメントのおかげで、不注意な誤りの訂正だけでなく、専門を異にする読者への配慮という観点から若干の書き直しをすることができた。以上の方々にこころより謝意を表したい。

語内部の異なる歴史的時期にみられる場合であれ、同系統の二つの言語のあいだにみられる場合であれ、一般に音法則とよばれるものは規則的な比較対応の表出でしかない。」と述べている¹。比較対応の正しい認定こそが言語の歴史的研究を推進していく原点に位置付けられるという見方はまったく正当であるが、その意味するところはより深く認識されてよいように思える。

歴史的に結び付いている複数の言語間に特異な特徴が共有される場合、その特徴を祖語から継承したものとみなすのは比較言語学における一般的な慣行である。形式と意味の観点からみて疑いようもない独特の対応がみられるとき、偶然の類似という可能性は通常排除される。しかしながら、非の打ちどころがないように思える比較対応が、実際にはそれぞれの言語内部で起こった独立した並行的な変化の結果であることがある。このようなケースは、特に数世紀に及ぶ文献記録を持っている言語によって実証されることが多い。本稿では、比較対応によって印欧祖語に遡るように一見思える独自の特徴が、実際には分派諸言語における二次的変化によって成立したことを示す事例について考えたい。以下の議論において決定的な役割を果たすのは、ヒッタイト語に代表される古代アナトリア諸語にみられる事実、とりわけ近年急速に進展しているヒッタイト文献学によって明らかにされつつある粘土板の時期区分である²。

¹ 同様の趣旨の記述は、アメリカ先住民、イロコイ語族やカド語族の諸言語の専門家である Wallace Chafe の論文にもみられる。「ほとんどの歴史言語学的方法は、複数の同源形式を比較するという手法に基本的に依拠している。この同源形式は、厳密な意味での比較方法の場合のように異なる言語から選ばれてもよいし、文献記録を用いる場合のように同一の言語の違った時期から選ばれてもよい。しかしながら、方言地理学におけるいくつかの状況は例外になりうるかもしれないが、一般に同源形式の比較をとまなわない歴史言語学的手法は認められていない。」(Chafe 1959: 478)。また、印欧祖語の動詞体系について壮大な構想を示している Jay Jasanoff も、「比較方法を適用するときに最初にしなければならない、そしてもっとも重要なステップは何を比較するかを知ることである。」と述べている (Jasanoff 2003: 28)。

² 1970 年以前のヒッタイト語研究においては、ヒッタイト語にも約 400 年にわたる内部の歴史があるということがほとんど考慮されなかったために、多くの点で正確とはいえない文法記述がなされてきた。ところが、近年の文献学的研究の進展によって、粘土板に記録された言語を古期、中期、後期ヒッタイト語に時期区分し、さらに粘土板資料が同時代のオリジナルなものか、あるいは古い時代の記録のコピーかを認定することがかなりの程度可能になった。ヒッタイト粘土板の時期区分における種々の問題については Heinhold-Krahmer, S., I. Hoffmann, A. Kammenhuber und G. Mauer (1979) を、具体的な分類については Yoshida (1990) の第 1 章を参照されたい。

この文献学的成果が持つ意義ははかり知れない。粘土板の時代区分が可能になったことによって、2つの大きな目標を達成するうえでの基盤が与えられるようになったからである。ひとつの目標は、音韻論、形態論、統語論のいずれのレベルであれ、それぞれの時代の共時的な分析結果を歴史的な観点から跡付けることによって、ヒッタイト語内部の言語史を解明することである。ヒッタイト語の歴史文法は、近年の文献学的成果に基づいて、今後根本的に書き改めなければならない。もうひとつの目標は、印欧諸語のなかでもっとも古い時期に書かれた古期ヒッタイト語の文法特徴を明らかにすることによって、古期ヒッタイト語の視点から、従来再建されていた印欧祖語を再検討することである。

2. 印欧語の中・受動態動詞語尾

本稿で問題とするのは、副題に示されているように、ギリシア語 $-\mu\acute{\alpha}\nu$ 、ヒッタイト語 $-(h)ḫaḫati$ 、リュキア語 $-\chi agā$ という中・受動態動詞 1 人称単数の 2 次（過去）語尾の対応関係である³。この問題を広い視点から考えるために、代表的な印欧諸語にみられる基本的な 1 次語尾と 2 次語尾を以下に示す（cf. Fortson 2010: 93–94）⁴。

中・受動態 1 次語尾

	印欧祖語	ヴェーダ	ギリシア語	ラテン語	トカラ語 B	ヒッタイト語 ⁵
sg. 1	*-h ₂ er	-e	-μαί	-or	-mar	-(h)ḫaḫa(ri), -(h)ḫa(ri) ⁶
2	*-th ₂ er	-se	-σαι, -οί ⁷	-re, -ris	-tar	-ta(ri), -tati
3	*-or, *-tor	-te, -e	-ται, -τοι	-tur	-tār	-a(ri), -ta(ri)
pl. 3	*-ntor	-nte, -ate	-νται, -ντοι	-ntur	-ntār	-nta(ri)

中・受動態 2 次語尾

	印欧祖語	ヴェーダ	ギリシア語	ラテン語	トカラ語 B	ヒッタイト語 ⁸
sg. 1	*-h ₂ e	-i, -e ⁹	-μᾶν ¹⁰	-(o)r	-mai	-(h)ḫaḫati, -(h)ḫati
2	*-th ₂ e	-thās	-σο	-re, -ris	-tai	-ta(ti)
3	*-o, *-to	-ta	-το	-tur	-te	-a(ti), -tati
pl. 3	*-nto	-nta, -ata	-ντο	-ntur	-nte	-ntati

印欧祖語の中・受動態動詞語尾としてどのような形式が再建されるかという問題は、能動態動詞語尾の場合にくらべると、けっして容易ではない。しかしながら、1 次語尾として 1 sg. *-h₂er, 2 sg. *-th₂er, 3 sg. *-or, *-tor, 3 pl. *-ntor が、2 次語尾として 1 sg. *-h₂e, 2 sg. *-th₂e, 3 sg. *-o, *-to, 3 pl. *-nto が一般に再建されている¹¹。中・受動態 1 次語尾と 2 次語尾の区別は、本来 1 次語尾にのみ付与されていた小辞 *-r によってなされていた。この点で、*-r は能動態動詞の 1 次語尾にみられる小辞

³ 印欧祖語には能動態と中・受動態という 2 つの態の区別があった。このうち、中・受動態は中動と受動の意味を同一の形式で表していた。

⁴ 1 次語尾は現在に、2 次語尾は過去に言及する形式である。なお 1 人称と 2 人称の複数語尾、および双数語尾については不明な点が多いため、ここでは扱わない。

⁵ 基本語尾に付与される -ri は、ヒッタイト語内部の歴史で独自の分布を示す。詳細については、Yoshida (1990) をみられたい。

⁶ -h₂ で始まる 1 人称単数語尾は子音語幹動詞に、-ḫ₂ で始まる 1 人称単数語尾は母音語幹動詞に付与される。

⁷ 2 人称単数、3 人称単数、3 人称複数語尾に含まれる母音 o は、アルカディア・キプロス方言とミケーネ方言にみられる。なお 2 人称単数 -oi は -σοι に遡る。

⁸ 過去基本語尾に随意に付与される小辞 -ti は、新しい時代のヒッタイト語では -t となる。なお、現在 2 人称単数語尾に付与される -ti とのあいだの歴史的関係については、Yoshida (1987) をみられたい。

⁹ -i は語幹形成母音を持つ動詞に、-e は語幹形成母音を持たない動詞にみられる。

¹⁰ -μᾶν はアッティカ方言では -μην に変化した。

¹¹ たとえば、Fortson (2010: 93–94) をみられたい。ただし、3 人称単数の *-to(r) という語尾は祖語の段階ではまだつくられていなかったと考えられる（cf. Yoshida 2007）。

*-i と機能的には類似している（能動態動詞 1 次語尾 1 sg. *-mi, 2 sg. *-si, 3 sg. *-ti, 3 pl. *-enti に対して、2 次語尾 1 sg. *-m, 2 sg. *-s, 3 sg. *-t, 3 pl. *-ent）。印欧祖語に遡る *-r を持つ 1 次語尾は、ラテン語とトカラ語、さらに二次的な形態変化を部分的に受けているが、ヒッタイト語と古期アイルランド語（連結形語尾 1 sg. *-ur, 2 sg. *-ther, 3 sg. *-dar, 3 pl. *-tar）に保持されている¹²。これに対して、ヴェーダやギリシア語、それにゴート語（1 sg. -da, 2 sg. -za, 3 sg. -da, 3 pl. -nda）では、*-r は能動態にみられる *-i に二次的に取って代わられた¹³。さらにほとんどの分派諸言語では、小辞 *-r を除いた中・受動態基本語尾自体も、対応する小辞 *-i を除いた能動態基本語尾 1 sg. *-m, 2 sg. *-s, 3 sg. *-t, 3 pl. *-ent からの形態的な影響を受けていることが分かる。この影響はギリシア語にもっとも顕著にみられる（1 sg. -μαι, -μᾶν, 2 sg. -σο(i), 3 sg. -το(i), 3 pl. -vτο(i)）。他方、ヒッタイト語では起源的な中・受動態基本語尾 1 sg. *-h₂e, 2 sg. *-th₂e, 3 sg. *-o, *-to, 3 pl. *-nto の特徴がほぼ忠実に保存されている¹⁴。

3. ギリシア語 -μᾶν とヒッタイト語 -(h)ḥaḥat(i)

3.1. ギリシア語 -μᾶν に内在する問題

前節の最後で述べたように、分派諸言語の歴史において中・受動態動詞語尾はパラダイム内での機能的位置がより明瞭になるように、対応する能動態動詞語尾からの形態的影響を受けている。ギリシア語 1 人称単数の 1 次語尾 -μαι と 2 次語尾 -μᾶν では、対応する能動態語尾 *-m(i) の m という要素が語尾の初頭に二次的に挿入されている。さらに同じ m という要素は、2 次語尾 -μᾶν では語尾末にも重ねて付与されている¹⁵。

1 人称単数以外の語尾については、うえで示したパラダイムから明らかなように、1 次語尾 2 sg. -οι (< *-σοι), 3 sg. -τοι, 3 pl. -vτοι から現在に言及する小辞 -i を取り除くと、2 次語尾 2 sg. -σο, 3 sg. -το, 3 pl. -vτο が規則的に導かれる。これが本来のパターンであったと考えられる。しかしながら、このような関係は 1 人称単数の 1 次語尾 -μαι と 2 次語尾 -μᾶν のあいだにはみられない。2 次語尾 -μᾶν の末尾の ν は後に付与された要素であるが、語尾に含まれている母音が 2 次語尾 -μᾶν では長い $\bar{\alpha}$ であるのに対して、1 次語尾 -μαι では短い α であるからである。この母音の長さの違いは、ギリシア語動詞形態論における難問のひとつであり、依然として未解決のまま残されている。

¹² ラテン語と古期アイルランド語では -r は 2 次語尾にも広がっている。ヒッタイト語の -ri は特定の条件のもとで存続した *-r に能動態に固有の *-i が付加されたものであるが、その起源の詳細については Yoshida (1990) をみられたい。

¹³ ゴート語の 1 sg. -da, 2 sg. -za, 3 sg. -da, 3 pl. -nda は、ヴェーダと同様に本来末尾が *-ai で終わっていた。

¹⁴ バルト語派とスラブ語派では、印欧祖語に遡る中・受動態は完全に消失している。

¹⁵ ギリシア語では語末の m は n に合流する。

3.2. Weiss (2009) の提案

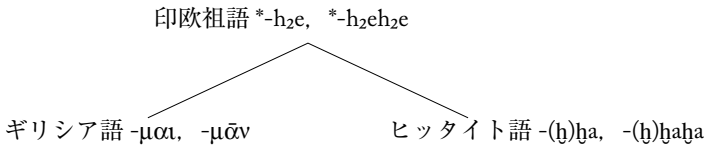
うえで指摘した問題について、Weiss は近年刊行された研究のなかで、1 人称単数中・受動態動詞の基本語尾として $*-h_2e$ とその反復形である $*-h_2eh_2e$ のふたつを印欧祖語に再建した (Weiss 2009: 387-389) ¹⁶。この見方に従えば、ギリシア語の 1 次語尾 $-\mu\alpha\iota$ と 2 次語尾 $-\mu\tilde{\alpha}\nu$ は、それぞれ $*-h_2e$ と $*-h_2eh_2e$ から以下のようなやり方で規則的に導かれると考えられる ¹⁷。

$$*-h_2e-r \rightarrow *-m-h_2e-i > *-m-h_2a-i > -\mu\alpha\iota$$

$$*-h_2eh_2e \rightarrow *-m-h_2eh_2e-m > *-m-h_2eh_2e-n > *-m-h_2ah_2a-n > *-m-aa-n > -\mu\tilde{\alpha}\nu$$

すなわち、2 次語尾 $-\mu\tilde{\alpha}\nu$ に含まれる長母音を、喉音 $*h_2$ (隣接する母音 e を a に変える特徴を持つ) が消失した後に残った 2 つの短母音の融合によって導くのである。

$*-h_2eh_2e$ という反復語尾の再建形によって説明できるのがギリシア語 $-\mu\tilde{\alpha}\nu$ だけであるならば、この提案はまったくアドホックである。しかしながら、反復語尾を再建する根拠は別の語派にもみられるのである。ヒッタイト語の 1 人称単数中・受動態語尾には、現在形 $-(h)ḫa(ri)$ 、過去形 $-(h)ḫat(i)$ 、命令形 $-(h)ḫaru$ という非反復形に加えて、現在形 $-(h)ḫaḫari$ 、過去形 $-(h)ḫaḫat(i)$ 、命令形 $-(h)ḫaḫaru$ という反復形が実際の資料に記録されている。ギリシア語 $-\mu\alpha\iota$ 、 $-\mu\tilde{\alpha}\nu$ とヒッタイト語の基本語尾 $-(h)ḫa$ 、 $-(h)ḫaḫa$ が対応するのであれば、それぞれの歴史的な関係はつぎのように図示することができる ¹⁸。



ギリシア語 $-\mu\alpha\iota$ とヒッタイト語 $-(h)ḫa$ が対応し、印欧祖語の $*-h_2e$ に遡るという見方については、実質的な異論はないように思われる。2 節で示した語尾のパラダイムに含まれている他の言語の形式も、印欧祖語の $*-h_2e$ からほぼ無理なく説明されるからである。しかしながら、反復語尾であるギリシア語 $-\mu\tilde{\alpha}\nu$ とヒッタイト語 $-(h)ḫaḫa$ の対応が妥当であると言うためには、より詳細な分析が必要になる。なぜなら、ひとつには反復語尾を再建する根拠がギリシア語とアナトリア語派以外の言語に欠けているからである。また、ギリシア語 $-\mu\alpha\iota$ と $-\mu\tilde{\alpha}\nu$ のあいだには、前者が

¹⁶ Michael Weiss との個人的な談話によると、 $*-h_2eh_2e$ という再建形は Calvert Watkins のアイデアであるとのことである。

¹⁷ ただし、Weiss の記述は必ずしも明瞭でなく、一貫していないと思える部分がある。 $-\mu\tilde{\alpha}\nu$ については、ほぼ同じ歴史的説明が Pinault (2008: 630) にもみられる。以下において、不等号 (>, <) は音変化、矢印 (→, ←) は形態変化を意味する。

¹⁸ ただし、ヒッタイト語については語尾の基本部分だけを示している。

1次語尾であるのに対して、後者が2次語尾という機能的な違いがみられる。他方、ヒッタイト語の $-(h)ḥa$ と $-(h)ḥaḥa$ のあいだにはそのような機能的差異はなく、両者とも1次語尾あるいは2次語尾として用いられている。これらの問題に配慮しながら、つぎの節ではヒッタイト語内部の歴史のなかでの $-(h)ḥaḥa$ の分布を調べることによって、 $μāṽ$ と $-(h)ḥaḥa$ とのあいだの対応の妥当性について検証したい。

3.3. ギリシア語 $-μāṽ$ とヒッタイト語 $-(h)ḥaḥat(i)$ のあいだの対応の妥当性

3.3.1. ヒッタイト語内部の歴史のなかでの $-(h)ḥaḥa$ の分布

$-(h)ḥaḥa$ を基本語尾とする現在形 $-(h)ḥaḥari$ 、過去形 $-(h)ḥaḥat(i)$ 、命令形 $-(h)ḥaḥaru$ の実例は以下のとおりである¹⁹。

- ar-ḥa-ḥa-ri ‘I stand’ KBo IV 8 III 7 (NH)
 ar-ḥa-ḥa-at KUB XXVI 1 III 30 (NH)
 ar-ḥa-ḥa-ru KBo IV 14 III 6 (NH), VBoT²⁰ 120 II 20 (MH/NS)
 a-uš-ḥa-ḥa-at ‘I saw’ KUB XXXI 121a II 20 (NH)
 [e-e]š-ḥa-ḥa-ti ‘I sat’ KUB XXVI 71 I 21 (OH/NS)
 e-eš-ḥa-ḥa-ti KUB XXXVI 98b Rs. 8 (OH/NS)
 e-eš-ḥa-ḥa-at KBo XVI 1 I 30, KBo XVI 8 II 14, KBo V 8 II 40 (NH)
 LUGAL-ez-zi-ja-aḥ-ḥa-ḥa-at ‘I became a king’ KUB XXIII 99 Vs. 3 (NH)
 i-ja-aḥ-ḥa-ḥa-at ‘I marched’ KUB I 1 I 48, II 80 (NH)
 ka-ri-ja-aḥ-ḥa-ḥa-at ‘I was gracious toward’ KUB XIX 49 I 47 (NH)
 kiš-ḥa-ḥa-ri ‘I become’ KUB XXVI 12 II 9 (NH)
 ki-iš-ḥa-ḥa-at KUB I 1 I 24, III 12, IV 48 (NH)
 ma-uš-ḥa-ḥa-at ‘I fell’ KUB I 1 III 24 (NH)
 pa-aḥ-ḥa-aš-ḥa-ḥa-at ‘I protected’ KUB XXI 1 I 72 (NH)
 ua-aš-ši-ja-aḥ-ḥa-ḥa-at ‘I was dressed’ KUB XXIV 5 Rs. 15 (NH)
 ú-e-ri-ja-aḥ-ḥa-ḥa-ri ‘I called’ KUB XL 33 Vs. 11 (NH)
 ú-e-ri-aḥ-ḥa-ḥa-at KUB XXVI 32 I 13 (NH)

¹⁹ 略号：NH = Neo-Hittite, MH/NS = Middle Hittite in Neo-Hittite Script, OH/NS = Old Hittite in Neo-Hittite Script。ヒッタイト語粘土版文書はすべてがオリジナルであるわけではなく、その多くは後の時代のコピーである。NH は後期ヒッタイト語のオリジナル、MH/NS は中期ヒッタイト語テキストの後期ヒッタイト語によるコピー、OH/NS は古期ヒッタイト語テキストの後期ヒッタイト語によるコピーを意味する。

ヒッタイト語文書の多くは、粘土板をそのまま模写したかたちで、つぎの2つのシリーズに刊行されている。KBo = *Keilschrifttexte aus Boghazköi*. Berlin および KUB = *Keilschriftkunden aus Boghazköi*. Berlin。個々の形式に続いて示されている情報、たとえば KBo IV 8 III 7 は、KBo のシリーズの4巻の8番の写本のコラム III の7行目にその形式が記録されていることを表す。

なおヒッタイト楔形文字が表音的に使われる場合、音節文字であるために、語を構成する文字をハイフンでつなぐ転写方法をここでは採用した。本論中の実例は Yoshida (2010) に基づく。

²⁰ VBoT = *Verstreute Boghazköi-Texte*.

このデータからつぎの事実が明らかになる。反復語尾は古期ヒッタイト語や中期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板には1例もなく、すべての例は後期ヒッタイト語の粘土板に記録されている。すなわち、20例がNHに、2例がOH/NSに、1例がMH/NSに認められる。一方、非反復語尾のほうは古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土版にも、後期ヒッタイト語のオリジナルの粘土版にも記録されている。たとえば、ki-iš-ḫa 'I become' KBo XXII 2 II 15 (OH/OS), ar-ḫa-ri 'I stand' KBo XVII 1 I 7; KBo XVII 3 I 2 (OH/OS), i-ja-aḫ-ḫa-ri 'I march' KUB XXI 10, 8 など (NH), i-ja-aḫ-ḫa-at 'I marched' KBo III 4 II 15 など (NH), である。以上のことから、非反復語尾はヒッタイト語の歴史時代(紀元前16世紀から13世紀)を通して記録されているのに対して、反復語尾の分布は後期ヒッタイト語に片寄っていることが分かる²¹。つまり、非反復語尾 -(h)ḫa が反復語尾 -(h)ḫaḫa になる形態変化は、ヒッタイト語の歴史の遅い時期に生産的に働いており、後期ヒッタイト語においてもなお進行中であったと考えられる。

さてここで、再建される印欧祖語がいつの時期に遡るかという問題についてみてみたい。Watkins (1994: 46) は印欧祖語を今から7千年前、すなわち紀元前5千年頃に話されていた共通基語と考えている。また Jasanoff (2003: 17) は紀元前4千年頃という見方を示している。もし反復語尾 *-h₂eh₂e が印欧祖語にあったと考えるならば、*-h₂e → *-h₂eh₂e という形態変化の速度は例外的に遅いということになる。すなわち、紀元前4,5千年頃の印欧祖語の段階 (*-h₂e → *-h₂eh₂e) から紀元前1,300年頃の後期ヒッタイト語の時期 (-(h)ḫa → -(h)ḫaḫa) にいたるまで、約3,000年にわたって作用していたことになる。このような長期にわたる言語変化はまったく非現実的である。したがって、*-h₂eh₂e という語尾が印欧祖語に存在していたとは考えることはできない²²。一見何の問題もなさそうにみえる、ギリシア語 -μαῖν とヒッタイト語 -(h)ḫaḫa の比較対応は幻想にすぎない。

3.3.2. 反復語尾がつくられた動機

前節に示した反復語尾を持つ形式を注意深く分析するならば、以下の2つの事実気付く。

1. 反復語尾を持つ形式の圧倒的多数は過去形である。23例のうちで過去形が18例 (ar-ḫa-ḫa-at, a-uš-ḫa-ḫa-at, [e-c]š-ḫa-ḫa-ti, e-eš-ḫa-ḫa-ti, e-eš-ḫa-ḫa-at 3例, LUGAL-ez-zi-ja-aḫ-ḫa-ḫa-at, i-ja-aḫ-ḫa-ḫa-at 2例, ka-ri-ja-aḫ-ḫa-ḫa-at, ki-iš-ḫa-ḫa-at 3例, ma-uš-ḫa-ḫa-at, pa-aḫ-ḫa-aš-ḫa-ḫa-at, ūa-aš-ši-ja-aḫ-ḫa-ḫa-at, ú-e-ri-aḫ-ḫa-ḫa-at), 現在形が3例 (ar-ḫa-ḫa-ri, kiš-ḫa-ḫa-ri, ú-e-ri-ja-aḫ-ḫa-ḫa-ri), 命令形が2例 (ar-ḫa-ḫa-ru 2例) である。

²¹ 特に ki-iš-ḫa (OH/OS) → kiš-ḫa-ḫa-ri (NH), ar-ḫa-ri (OH/OS) → ar-ḫa-ḫa-ri (NH) という形態変化が歴史時代にみられることに注目されたい。

²² かりに印欧祖語の時期を紀元前3千年頃に想定したとしても、本稿での主張には影響を与えない。

2. 実例のうち、3例が *hi-* 動詞の中・受動態 (*au(š)-*, *mauš-*, *pašš-*)²³、17例が対応する能動態を欠く中・受動態 (*media tantum*) である (*ar-* 4例, *eš-* 5例, *LUGAL-ezzija-*, *iġa-* 2例, *karija-*, *kiš-* 4例)。

この2つの事実に対して歴史的な説明を与えるためには、*mi-* 動詞、*hi-* 動詞および中・受動態動詞の1人称単数形が、アナトリア祖語の時期においてどのような語尾によって特徴付けられていたかをみる必要がある。それらは以下のとおりである。

	<i>mi-</i> 動詞	<i>hi-</i> 動詞	中・受動態動詞
現在	*-mi	*-h ₂ ei	*-h ₂ er
過去	*-m	*-h ₂ e	*-h ₂ e

一見して、現在時制では1人称単数の中・受動態語尾 *-h₂er が、*mi-* 動詞語尾 *-mi からも、*hi-* 動詞語尾 *-h₂ei からも、形式的に区別されていることが分かる。それに対して、過去時制においては状況が異なる。1人称単数の中・受動態過去語尾 *-h₂e は、*mi-* 動詞過去語尾 *-m からは形式的に区別されているが、*hi-* 動詞過去語尾 *-h₂e とのあいだには区別がない。この状況は、機能的な観点から望ましくない。したがって、中・受動態過去語尾 *-h₂e は、*hi-* 動詞過去語尾 *-h₂e との形式的同一性を回避し、明確に区別されるために、反復語尾 *-h₂eh₂e をとるようになったと考えることができる。このヒッタイト語の先史に生じた変化は、*paḫḫašḫaḫat* (1人称単数中・受動態過去) と *paḫḫašḫun* (1人称単数 *hi-* 動詞過去) というペアになおよく反映されている²⁴。*mi-* 動詞の1人称単数過去語尾 *-m と対応する中・受動態の *-h₂e の関係については、両者はまったく異なる語尾であるために、さらなる形式的な特徴付けの必要がなかったと考えられる。しかしながら、さきの実例のなか

²³ ヒッタイト語および他のアナトリア諸語には、能動態に2種類ある。それらは異なる語尾を取るが、1人称単数現在形語尾に代表させて、*mi-* 動詞および *hi-* 動詞とよばれる。両者のあいだに機能的な違いはない。*mi-* 動詞は、他の語派の語幹形成母音をとらない能動態動詞 (athematic active) に対応する。一方、*hi-* 動詞の起源については、なお活発な議論がなされている。くわしくは、*Jasanoff* (2003) の第1章を参照されたい。

LUGAL-ezzija- (= *ḫaššuezzija-*) については、*Puhvel* (1991: 242) と *Kloekhorst* (2008: 328) は、*LUGAL-ez-zi-at* XXIII 1 I 29, 42, II 21 を3人称単数能動態過去と解釈していることから、*mi-* 動詞として扱っている。しかしながら、この *LUGAL-ez-zi-at* は a-クラスの中・受動態の3人称単数過去形と考えるべきである (cf. *Neu* 1968a: 109)。以下の2つの例文のなかであられる *LUGAL-ezziat* と *LUGAL-ezzijatta[t]* のあいだに、機能的な違いは感じられない。KUB XXIII 1 I 28-9 *GIM-an=ma* ¹*NIR.GÁL-is* ²*ŠEŠ ABI* ³*UTU-ŠI* *LUGAL-ezziat* 'but when Muwatallis, my majesty's father's brother, became king'. *IBoT* II 131 I 9 *kuit=ḫa* ⁴*ABI* ⁵*UTU-ŠI* *LUGAL-izzijatta[t]* 'as my majesty's father became king' (*IBoT* = Istanbul arkeoloji müzelerinde bulunan Boğazköy tabletlerinden seçme metinler)。*LUGAL-ezzijatta[t]* は二次的に ta-クラスに移行した中・受動態動詞である。

²⁴ *paḫḫašḫaḫat* については、さきに示した実例のリストに含まれている。 *paḫḫašḫun* に含まれている1人称単数 *hi-* 動詞過去語尾 -*hun* は、音韻的に予想される -*ha* (< *-h₂e) が対応する *mi-* 動詞語尾 -*un* (< *-m) からの影響を受けて二次的につくられた、と考えられる。

には、*ua-aš-ši-ja-aḥ-ḥa-ḥa-at*, *ú-e-ri-ja-aḥ-ḥa-ḥa-ri*, *ú-e-ri-aḥ-ḥa-ḥa-at* にみられるように、*mi-* 動詞語幹からつくられる中・受動態の反復形式が含まれている。ただし、これらの形式は、マインツ大学の Silvin Košak によるヒッタイトテキストのオンライン・コンコーダンスによると、すべて後期ヒッタイトの遅い時期の粘土版 (*sjh* = 'spätjunghethitisch') に記録されている。したがって、先史においてつくられた形式ではない²⁵。

反復語尾は最初に過去形においてつくられ、後になってから二次的に現在形にも広がったという主張は、以下の2つの事実によってさらなる支持を得る。まず注目したいのは、1人称単数現在中・受動態語尾として *-(h)ḥaḥari* という反復語尾以外に2つの別の語尾が記録されていることである。それらは、*-(h)ḥa* と *-(h)ḥari* である。前者の例として *kišḥa* 'I became' KBo XXII 2 II 15, *parašḥa* 'I break' KBo XVII 1 III 14 など、後者の例として *aḥari* 'I stand' KBo XVII 1 I 7, *[e]škaḥhari* 'I sit (imperfective)' KBo VII 14 Vs. 17 などがある。しかしながら、*-(h)ḥaḥa* という *-ri* を持たない反復語尾はまったく記録にはない。もしも反復された現在語尾がヒッタイト語の先史の早い時期につくられたのであるならば、古い時期のヒッタイト語に *-(h)ḥaḥa* が記録されているはずである。なぜなら、*-ri* によって拡張された中・受動態の形式は古期ヒッタイト語にはきわめて稀であるからである²⁶。この事実は、現在形の反復語尾の成立が遅かったことを示している。

本稿での主張を裏付けるもうひとつの事実は、反復形式の実例のなかに *[e-e]š-ḥa-ḥa-ti*, *e-eš-ḥa-ḥa-ti* という *-ti* という小辞を持つ形式が記録されていることである (ともに OH/NS の粘土板に書かれている)。*-ti* という随意的に付与される小辞は古期ヒッタイト語に特有であり、後のヒッタイト語では語末母音脱落 (apocope) を受け、*-t* となったことはよく知られている²⁷。したがって、*[e-e]š-ḥa-ḥa-ti*, *e-eš-ḥa-ḥa-ti* は古期ヒッタイト語のテキストを後期ヒッタイトの時期に写し直した粘土

²⁵ *ua-aš-ši-ja-aḥ-ḥa-ḥa-at* については、*-ja-* という接尾辞によって二次的に拡張されているが、語根クラスの *ú-e-eš-ša-an-da* KBo XVII 1 I 24 (OH/OS), KBo XVII 3 I 19 (OH/OS) よりも新しい形式である。後者は、楔形文字ルウィ語 *ua-aš-ša-an-ta-ri* やサンスクリット *váste* に比定することができる。*ua-aš-ši-ja-aḥ-ḥa-ḥa-at* は使役接尾辞を持つ *uašše/a-* (< **uos-éje/o-*) に取って代わった能動態語幹 *uaššija-* からつくられた中・受動態の形式である (cf. Eichner 1969: 31ff., Oettinger 1979: 304, Melchert 1984: 31f.)。

uerija- については、研究者の意見が分かれている。Oettinger (1979: 344) は、語根アオリスト **uerh₁-t* とは別に、接尾辞 **-je/o-* を持つ **uerh₁-je/o-* を印欧祖語に再建している。これに対して LIV (2001: 690) では、ヒッタイト語 *uerijezzi* をパラ語の *ú-e-cr-ti* よりも新しい二次的につくられた形式としている。

いずれにせよ、ヒッタイト語内部の根拠から *ú-e-ri-ja-aḥ-ḥa-ḥa-ri* と *ú-e-ri-aḥ-ḥa-ḥa-at* がともにきわめて新しい形式であることが保証される。

²⁶ くわしくは、Yoshida (1990) を参照されたい。語末の **r* は、印欧祖語の中・受動態動詞現在形の特徴であったが、アナトリア祖語の時期にアクセントのない母音の後で脱落した。ヒッタイト語の *-ri* は、存続した **r* に能動態に固有の **i* が付加されたものであるが、起源的にはアクセントのある3人称単数語尾のみにみられ (*-ári* ← **-ór + i*)、ヒッタイト語内部の歴史において徐々にパラダイムの他の位置に広がった。

²⁷ たとえば、Friedrich (1960: 79) に指摘されている。

板に書かれているが、書記は古期ヒッタイト語の形式を後期ヒッタイト語風に書き改めずに、そのままコピーしたというように理解される。つまり、この *-ti* を持つ反復形式は古期ヒッタイト語の時期に遡る古い特徴を反映していると言えることができる²⁸。同じ *eš-* という語根からつくられた反復形式は他に3例あり、いずれも後期ヒッタイト語のオリジナルに書かれているが、この点对照的である。なぜなら、それらはすべて語末母音脱落を受けた *e-eš-ḫa-ḫa-at* という形式だからである。このことから、*[e-e]š-ḫa-ḫa-ti*, *e-eš-ḫa-ḫa-ti* は後期ヒッタイト語の文法からみると、古風な表現であったに違いない²⁹。

以上の2つの事実の分析からも、1人称単数中・受動態の反復語尾はまず過去形において誕生したと見方が裏付けられる³⁰。

3.4. 小結

第3節では、ギリシア語の1人称単数中・受動態2次語尾 $-\mu\alpha\upsilon$ とヒッタイト語の反復語尾が歴史的に結びついており、印欧祖語の $*-h_2eh_2e$ に遡るという提案の妥当性について論じた。その結果、反復語尾 $*-h_2eh_2e$ は印欧祖語の時期にはまだ存在していなかったことが分かった。その理由は、 $*-h_2e \rightarrow *h_2eh_2e$ という形態変化は、後期ヒッタイト語になってから生産的に作用するようになったことが明らかであるからである。また、反復語尾は過去形にまずつくられ、その後現在形と命令形に広がった。反復語尾が過去形に最初にもたらされた動機については、アナトリア祖語の段階で1人称単数中・受動態過去語尾 $*-h_2e$ と ḫi- 動詞過去語尾 $*-h_2e$ が同一であったために、両者の機能的な違いを形式的に区別するためであった。

ヒッタイト語の1人称単数中・受動態の反復語尾 $-(\text{ḫ})\text{ḫaḫa}$ と非反復語尾 $-(\text{ḫ})\text{ḫa}$ のあいだには、意味的な差異はない。この点で、ギリシア語の1次語尾 $-\mu\alpha\iota$ と2次語尾 $-\mu\alpha\upsilon$ とは事情が異なる。さらに、ギリシア語 $-\mu\alpha\upsilon$ が祖語に遡る形式でないことが明らかになった以上、その起源については別の歴史的説明が必要となる。この問題については第5節で考えたい。

4. リュキア語 $-\gamma\alpha\acute{\gamma}\alpha$ とヒッタイト語 $-(\text{ḫ})\text{ḫaḫat(i)}$

4.1. Melchert (1992) の提案

1人称単数中・受動態の反復語尾を持つ形式は、ヒッタイト語以外の印欧語に

²⁸ いうまでもなく、古期ヒッタイト語には *-ti* を持つ非反復形式もあった。たとえば、*e-eš-ḫa-ti* KBo III 55 Rs. 6 (OH/NS), *ki-iš-ḫa-ti* KUB XXX 11 Rs. 22 (OH/MS) などである。

²⁹ 後期ヒッタイト語の粘土板に古い言語特徴が保持されていることは決して珍しくはない。たとえば、*a-ša-aš-ḫé* 'I settle' KBo III 28 II 24 (OH/NS) という形式は古期ヒッタイト語テキストの後期ヒッタイトの時期におけるコピーに記録されているが、新しい一般的な語尾 $-\text{ḫi}$ ではなく、古期ヒッタイト語に部分的に存続している $-\text{ḫe}$ という古い語尾を持っている。

³⁰ これとほぼ同じ知見は、Miguel Villanueva Svensson (2009) によっても示されている。文献学的な裏付けには違いがあるが、二人が別個に同様の言語学的解釈に到達したことをうれしく思う。なお、この論文をプレプリントのかたちで送ってくださった著者に謝意を表したい。

は長いあいだ確認されなかった。しかしながら、リュキア語の $a\chi ag\bar{a}$ 'I became' が 1 人称単数中・受動態過去の形式であることが Melchert (1992) によって指摘された³¹。Melchert はこの $a\chi ag\bar{a}$ という形式を動詞語幹 $a(i)$ - 'do, make' と語尾 $-\chi ag\bar{a}$ に分け、語尾 $-\chi ag\bar{a}$ がヒッタイト語の反復された過去語尾 $-(h)hah\bar{a}t(i)$ と細部にいたるまで正確な対応を示していると主張した³²。すなわち、基本語尾 $*-h_2e$ が反復されている点のみならず、リュキア語 $-\chi ag\bar{a}$ とヒッタイト語 $-(h)hah\bar{a}t(i)$ に含まれる最初の子音 χ と h が弱化を示していないのに対して、2 番目の子音 g と h が弱化を示している点である³³。Melchert によれば、このリュキア語の g は反復語尾 $*-h_2eh_2e$ の 2 番目の $*h_2$ に遡り、アナトリア祖語の時期においてアクセントのない短母音間の子音に生じた弱化規則が適用された結果である³⁴。 $*-h_2eh_2e$ の 1 番目の $*h_2$ についても、アクセントを持つ語幹の長母音の後で弱化を受けたと考えられるが、音法則によって予想される g ではなく、 χ で現れている。この χ は、子音語幹において規則的であり、そこからの類推によると考えられる ($a\chi ag\bar{a} < *Haha \leftarrow *haha^{35} < *i\bar{a}h-h_2eh_2e < *i\bar{e}h_1-h_2eh_2e$)。同じ類推変化は、規則的な $ag\bar{a}$ に対する $a\chi a$ と $a\chi \bar{a}$ という非反復形式にもみられる。そして、リュキア語にみられる語末母音の鼻音化とヒッタイト語の語末要素 $-t(i)$ は、それぞれの言語の内部で別個に生じた二次的な現象とする。以上の分析から、リュキア語 $-\chi ag\bar{a}$ とヒッタイト語 $-(h)hah\bar{a}t(i)$ は、若干の二次的变化を受けたにもかかわらず、基本的に正確な対応を示しており、1 人称単数中・受動態語

³¹ リュキア語は言語的に楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語に近く、アナトリア語派のなかでルウィ語群という下位グループを形成する。この3つの言語はアナトリア祖語から分岐後に、共通ルウィ語としてなお言語的にまとまっていたと考えられる。リュキア語資料は、ギリシア語アルファベットを原型にした独自のアルファベットで書かれており、紀元前1千年紀のなかごろに書き残された石碑文、貨幣銘などがアナトリア南西部で見つかっている。

³² リュキア語にみられる反復形式は $a\chi ag\bar{a}$ 一例のみであるが、過去形であるということから、反復語尾はまず過去形においてつくられたという前節での主張を支持する、さらなる根拠となる。

³³ 弱化を受けていない子音は強く (fortis)、音声的には長く発音されたり、無声であったりする。一方で、弱化を受けた子音は弱く (lenis)、音声的には短く、あるいは有声で実現する。ヒッタイト語においては、印欧祖語の子音の無声・有声の対立が子音の長さの対立に置き換わっている。これは歴史言語学的に興味深い問題であるが、本稿ではこれ以上ふれない。

³⁴ アナトリア祖語に作用した子音の2つの弱化規則については、Eichner (1973: 79-82, 100 note 86) および Morpurgo Davies (1982/83: 262) をみられたい。第1弱化規則はアクセントを持つ長母音の後で、第2弱化規則はアクセントのない短母音のあいだで作用した (ただし、Morpurgo Davies は弱化規則がアナトリア祖語に遡らないと考えている)。第1弱化規則と第2弱化規則は以下のように定式化できる。

- 1) $\check{V}TV > \check{V}DV$
- 2) $\check{V}CVTV > \check{V}CVDV$

後に、Adiego (2001) はモーラの観点からこの2つの規則をひとつの規則に統合した。すなわち、アクセントのある長母音を最初のモーラにアクセントのある2モーラ連続と再解釈すれば、アクセントのないモーラ間で子音の弱化が生じたことになる。アナトリア祖語においてアクセントを担う基本的な単位が音節ではなく、モーラであったことを示す別の根拠は、Yoshida (2011) のなかでも示されている。

³⁵ H は弱化を受けていない喉音、h は弱化を受けた喉音を表わす。

尾として反復語尾 *-h₂eh₂e がアナトリア祖語に再建されるべきであると Melchert は考える。

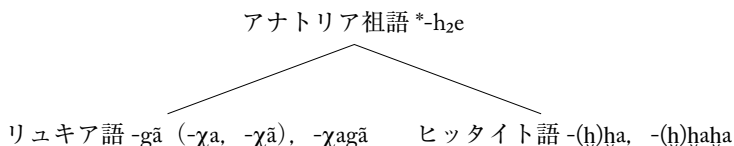
4.2. リュキア語 -χagā とヒッタイト語 -(h)ḫaḫat(i) のあいだの対応の妥当性

うへの Melchert の見方は説得力が備わっており、一見非の打ちどころがないように思える。しかしながら、すでにみたギリシア語 -μαῦν とヒッタイト語 -(h)ḫaḫat(i) の場合と同様に、ヒッタイト語内部の歴史を文献学的立場からみるならば、この見方の妥当性に重大な疑念が投げかけられる。

古アッシリア商人が残した資料にはヒッタイト語およびルウィ語の特徴を示す名前が含まれているために、ヒッタイト人とルウィ人はすでに紀元前 20 世紀の頃には中央アナトリアに居住していたとみなされている。したがって、アナトリア祖語は紀元前 3 千年紀中頃に遡ると推定される。前節で述べたように、ヒッタイト語の反復語尾 -(h)ḫaḫa は、後期ヒッタイトの時期になって生産的に使用されるようになったが、非反復語尾 -(h)ḫa とのあいだには機能的差異がなく、両者は并存していた。もし反復語尾がアナトリア祖語の時期に成立していたと仮定するならば、後期ヒッタイト語にいたるまで 1 千年以上ものあいだ、反復語尾と非反復語尾が自由変異の関係にあったことになる。このような長期にわたって、2 つの語尾が自由変異のままであったという見方は受け入れがたい。

また、反復語尾はヒッタイト語とリュキア語には記録されているが、他のアナトリア諸語、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、パラ語には 1 例もみられない。もしアナトリア祖語の段階に反復語尾がつくられたとするなら、これらの言語における反復語尾の完全な欠如に対して合理的な理解を与えることは困難である。

以上の分析によって、リュキア語 -χagā とヒッタイト語 -(h)ḫaḫat(i) の比較対応は一見合理的にみえるが、やはり幻想であると言うことができる。1 人称単数中・受動態の反復語尾はアナトリア祖語の時期には存在しておらず、以下の図が示すように、リュキア語とヒッタイト語のそれぞれの先史の比較的遅い時期に、別個につくられたと考えられる。



4.3. 反復語尾の 2 番目の子音にみられる弱化

これまでの筆者の分析が正しいとしても、なお重大な問題がひとつ残っている。その問題は、ヒッタイト語 -(h)ḫaḫari, -(h)ḫaḫat(i), -(h)ḫaḫaru とリュキア語 -χagā という反復語尾の第 2 子音が一貫して弱化を示していることに関連する。アナトリア祖語の時期に生じた子音の弱化規則は、後の分派諸言語の歴史においてもはや作

用しなくなったと一般に考えられている。したがって、*-h₂e (> *-He) から *-HeHe への形態変化がヒッタイト語とリュキア語の先史において起こったのであれば、弱化規則がもはや作用していないために、第2子音が強い h_h と χ を持つ -(h)h_hhari および -χαχā が予想される。しかしながら、実際には2番目の子音は常に弱化を示している。これがつぎに解決しなければいけない問題である。

ところで、アクセントのない短母音のあいだの子音に生じた第2弱化規則が、楔形文字ルウィ語とリュキア語の先史になお作用し続けていたという根拠がある。たとえば、楔形文字ルウィ語 *aggat(i)*-‘*hunting net*’ にみられるシングルの -t- は、ヒッタイト語 *ēkt*-‘*id.*’ と比較すれば、語中の子音間に母音 a が挿入された後、アクセントのない母音間で弱化が生じた結果、もたらされたと考えられる (**ēkt*- > **ēkat*- > **ēkad(i)*- > *aggat(i)*-) ³⁶。同様に、リュキア語 *ap[p]di* ‘*seizes*’ あるいは *ap[d]di* ‘*id.*’ についても、後に語中音脱落が起こっているが、うへの楔形文字ルウィ語 *aggat(i)*- とまったく並行的な変化が生じている (**épti* > **épati* > **épadi* > *ap[p]di* あるいは *ap[d]di*) ³⁷。このように子音の第2弱化規則は楔形文字ルウィ語とリュキア語の先史になお観察されるために、これら2つの言語よりもいっそう古い時期に記録されたヒッタイト語の先史にもなお作用していたと考えることには何ら無理はない ³⁸。次節では、この見方を裏付ける事実を指摘したい。

4.4. ヒッタイト語中・受動態動詞過去の小辞 -ti

子音の第2弱化規則がヒッタイト語の先史においてもなお作用していたという根拠は、中・受動態動詞過去に随意に付与される小辞 -ti から得られる ³⁹。小辞 -ti はヒッタイト語以外のアナトリア諸語にみられないために、ヒッタイト語独自の革新と考えられる。注目しなければいけないのは、この -ti は母音の後でつねにシングルの -t- で書かれている点である。-ti の起源のついてもっとも有力な見方は、アナトリア祖語の再帰小辞 *-ti に由来するという立場である。この見方は Neu (1968b: 144ff.) によってまず提案され、後に Melchert (1992: 192) によって補強された。以下に示す図から分かるように、その成立のプロセスについてはより詳細な分析を施しているが、筆者も基本的にこの見方に賛同したい。その理由は、意味・機能的

³⁶ Melchert (1994: 69) を参照。ヒッタイト語 *ēkt*- には、本来の子音連続が保存されている。

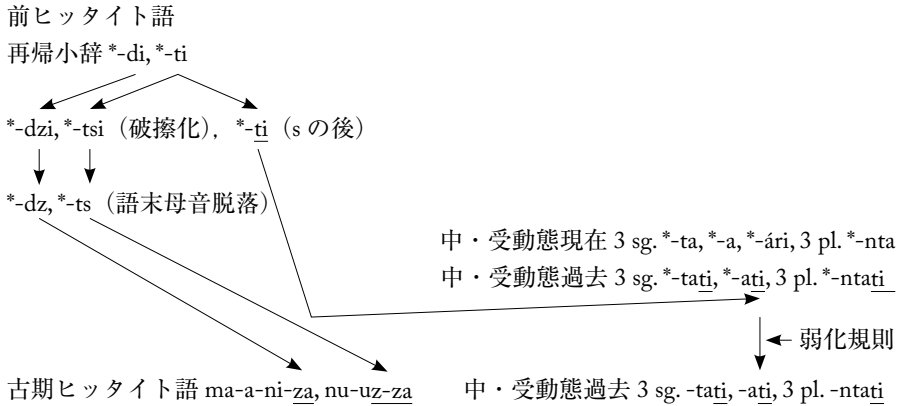
³⁷ Melchert (1994: 313) を参照。ヒッタイト語 *ēpzi* ‘*id.*’ は、やはり古い状態を保持している。

³⁸ アクセントのある長母音の後の子音に生じた第1弱化規則についても、ルウィ系諸言語の先史に存続していたという根拠がある。楔形文字ルウィ語 *manāti* ‘*sees*’ (< **mnéh₂-ti*) にみられるシングルの -t- は、**h₂* の消失にともなう先行母音の代償延長の後で子音の第1弱化規則が働いたと考えることによって説明される (cf. Melchert 2007: 3)。リュキア語 *prīnawate/ē* ‘*built*’ (< **prnoéh₂-to*) にみられる無声の (弱化していない) -t- は、Melchert (1994: 69) の見方とは反対に二次的要因による (Hajnal 1995: 162note182 を参照)。

³⁹ すでに述べたように古期ヒッタイト語では -ti がみられるが、後に -t となった。中・受動態現在においては、2人称単数 -tati と1人称複数 -qaštati という -ri ではなく、-ti を持つ語尾の形式があるが、これは二次的な形態変化による。くわしくは、Yoshida (1987) をみられたい。

な観点からすれば、中・受動態は再帰小辞と自然な結びつきがあるからである⁴⁰。

筆者の見方によると、ヒッタイト語中・受動態動詞過去の小辞 *-ti* の先史はつぎのようにまとめることができる。



前ヒッタイト語の時期には、**-ti* および **-ti* から弱化規則によってつくられた **-di* という2つの再帰小辞が存在していた。その後のヒッタイト語の先史において、**-ti* と **-di* は破擦化と語末母音脱落を受けた結果、それぞれ **-ts* と **-dz* になった⁴¹。これによってつくられた **-ts* と **-dz* は、それぞれ古期ヒッタイト語のシンタグマ *nu-uz-za* (< **nú-ti*) 'and-(reflexive)' と *ma-a-ni-za* (< **mān-oi-di* < **mān-oi-ti*) 'when-they-(reflexive)' にみられるダブルの *-zz-* とシングル *-z-* に反映されている⁴²。

また、もし中・受動態過去の小辞 *-ti* が歴史的にみて再帰小辞に由来するのであるならば、この破擦化をまぬがれたヴァリエントがあったに違いない。そして以下で示すように、このようなヴァリエントは実際に存在したと考えられる。**t* の破擦化が **s* の後で妨げられたことはよく知られている⁴³。ところが、ヒッタイト語には

⁴⁰ Pedersen (1938: 108f), Watkins (1969: 78), Oettinger (1997: 413ff.) によって提案された別の見方もある。それは、*-ti* をサンスクリット語 *ihī* やギリシア語 *ἴη*, ヒッタイト語 *it* (< **h₁i-dhi* "You go!") にみられる2人称単数命令形語尾 **-dhi* と歴史的に関係付けようとするものである。しかしながら、機能的関連性という点でこの見方には問題がある。

⁴¹ 一般に **d* は、**t* と違って、**i* の前で破擦化を蒙らなかったと考えられている。しかしながら、破擦化は **d* にも生じている。この見方を裏付けるほかの根拠は、Yoshida (2001a: 84-85) に要約されている。

⁴² 楔形音節文字の書記法の限界から、語末の *za* という文字に含まれる *a* はダミーで、発音されていなかったと考えられる。また、古期ヒッタイト語には *nu-uz-za* よりも古い *nu-uz* が記録にあることを考えると、*nu-uz* の末尾の破擦音が弱化していないことをダブルの *-zz-* によって明瞭に示すために、書記は *-za* を付与したと考えられる。この解釈が正しければ、古期ヒッタイト語では破擦音についても弱化と非弱化という対立があったことになる。

⁴³ たとえば、*palḥašti* 'breadth' (< *palḥi* 'broad') や *pargašti* 'height' (< *parku-* 'high') に代表されるように、抽象名詞を導く *-ašti-* という接尾辞を持つ中性名詞では *t* の破擦化がみられない (cf. Joseph 1984)。

nu-uš-za ‘and-them-(reflexive)’, na-aš-za ‘and-he-(reflexive)’, nu-naš-za ‘and-us-(reflexive)’, nu-šmaš-za ‘and-you/them-(reflexive)’などにみられるように、šの後に再帰小辞 -za が⁴⁴後続する例が数多くある。これらのšの後の -za は、破擦化を受けなかった *-ti に二次的に取って代わったものに違いない。そして、*s の後で破擦化を免れた *-ti は、中・受動態現在語尾と過去語尾のあいだの形式上の区別を明瞭にするために、中・受動態過去語尾に付与されるようになったと考えられる⁴⁴。このようにして中・受動態過去語尾と結び付くようになった再帰小辞 *-ti は、ヒッタイト語では母音間でつねにシングルの -t- と綴られているために⁴⁵、*-ti が中・受動態過去語尾に付与された段階で第2弱化石規則はなお作用していたと解釈することができる⁴⁶。

4.5. 小結

リュキア語 -ḡagā とヒッタイト語 -(h)ḡaḡat(i) という1人称単数中・受動態過去語尾は、一見したところ細部にわたって正確に対応しているように見える。しかしながら、後期ヒッタイト語の時期においても反復語尾と非反復語尾が自由変異の関係にあるということや他のアナトリアの言語に反復語尾が欠如していることを考えると、アナトリア祖語の時期に *-h₂eh₂e という反復語尾が存在していたとは言えない。リュキア語 -ḡagā とヒッタイト語 -(h)ḡaḡat(i) は、それぞれの言語の内部の先史において別個につくられたに違いない。語尾に含まれている二番目の弱化石子音 g と

⁴⁴ -ri によってマークされる中・受動態現在語尾は、アクセントを有する3人称単数語尾 *-ári に本来限られていて、パラダイムの他の位置にある語尾は中・受動態過去語尾と同一の形式であった (cf. Yoshida 2001b: 87-88)。

⁴⁵ 弱化石が働かなかつたと考えられる唯一の例外は、アクセントを有する *-á という少数の3人称単数過去語尾である。しかし、この場合も音韻的に予想される非弱化石子音は、類推によって容易に弱化石子音に取って代わられる。

⁴⁶ Yakubovich (2009: 182-196) は、ヒッタイト語の再帰小辞 -z(a) はルウィ語の代名詞クリティック *-ti と *-di の借用であると論じている。さらに、これらの代名詞クリティックは究極的に印欧祖語の2人称単数与格クリティック *-toi からいくつかの類推変化によって導かれたと考えている。アナトリア祖語の再帰小辞 *-ti に関して、他の語派における信頼できる同源形式がこれまで報告されていないために、この試みは注目される。しかしながら、彼の主張全体が本論にかかわってくるわけではない。本論に関与するのは、再帰小辞が前ヒッタイト語の時期に中・受動態過去に付与されるプロセスと時期である。Yakubovich (2009: 204) は、弱化石 *-di が中・受動態過去語尾に直接付与されるようになったと考えているが、この見方に十分な動機付けがあるようには思えない。本稿での見方では、この付与が起こったのはより遅い時期であり、*-ti と *-di に破擦化が起こって以降である。-z(a) のほうは再帰小辞としての本来の機能を保持しているのに対して、中・受動態過去に付与されるようになった *-ti は本来の機能を離れて、中・受動態過去を特徴付けるという二次的な役割を果たすようになっている。この形態変化は Kurylowicz の類推の第4法則をよく例証しているように見える。「変化によってひとつの形式が分化するとき、新しい形式は一次的な機能をはたすのに対して、類推によって駆逐される古い形式は二次的な機能を担うようになる。」(Kurylowicz 1966: 169)。

類型論的な立場から類似した現象が象形文字ルウィ語にみられるのは興味深い。この言語では、再帰小辞の *-di と r- 音化した *-ri が本来の機能を保っているのに対して、おそらく印欧祖語の3人称単数の再帰代名詞に遡る、まれにしか使われない -si あるいは -sa という小辞は中・受動態過去に付与されるようになっている (cf. Oshiro 1993: 53-54, Rieken 2004)。

-h- は、反復語尾がつくられたときになお作用していた子音の第2弱化規則によるものである⁴⁷。

5. ギリシア語 -μᾶν の先史

第3節で示したように、反復語尾 *-h₂eh₂e は印欧祖語の時期にはまだ存在していなかったことが分かった。したがって、ギリシア語1人称単数中・受動態2次語尾 -μᾶν が祖語の *-h₂eh₂e (> *-m-h₂eh₂e-m) をそのまま反映しているとは考えられない。ただ、ヒッタイト語の先史において反復語尾 -(h)haha が最初にもたらされたのが過去形であったことと並行的にとらえるならば、過去に言及する2次語尾 -μᾶν も同様にギリシア語内部の先史で二次的につくられたという可能性について考えてみたくなる。しかしながら、この点でヒッタイト語とギリシア語は事情が異なる。ヒッタイト語の場合は、反復語尾の成立の背景に、hi- 動詞と中・受動態動詞の1人称単数過去語尾を形式的に区別しようという動機があった。これに対して、ギリシア語の場合にはそのような動機をみつけることは不可能である。したがって、ギリシア語 -μᾶν には別の歴史的説明が必要である。

印欧祖語に再建される中・受動態動詞1人称単数の基本語尾が *-h₂e ではなく、*-h₂ であると見方が Kortlandt (1981) と García-Ramón (1985) によって提案されている⁴⁸。これに関連して、語幹形成母音をともなう能動態動詞(いわゆる thematic タイプ)については、1人称単数語尾として *-h₂ を建てる見方が現在では一般的になっている⁴⁹。*-h₂ を建てることによって、ゲルマン諸語とバルト語派の先史にみられる語末の2モーラ長母音の短縮が無理なく説明されるからである。たとえば、ゴート語 baira 'I bear' (< *-ō < *-o-h₂) やリトアニア語 vedù 'I lead' (< *védūo < *védō < *-o-h₂) の先史において⁵⁰、代償延長によって *-o-h₂ からつくられる語末の2モーラ長母音 *-ō は1モーラに短縮している。もし *-h₂e を建てるならば、ゴート語とリトアニア語の形式は実際の baira, vedù ではなく、母音間の *h₂ の消失によってつくられる2モーラの **bairo (< *-o-h₂e)⁵¹, **veduō (< *-o-h₂e) になるはずである。語幹形成母音をともなう能動態動詞の1人称単数に *-h₂ という語尾を再建するのであれば、それと軌を一にするやり方で中・受動態動詞1人称単数にも *-h₂ を再建することはアプリアリには不自然でないように思える⁵²。

⁴⁷ 子音の弱化規則がヒッタイト語の歴史時代にはもはや働いていなかったことは明らかである。もしも存続していたとするならば、たとえば重複音節にアクセントを有する動詞 mema-'speak' の2人称単数と2人称複数現在形として、それぞれ **memati, *memateni が予想されるが、実際には mematti, mematteni である。

⁴⁸ ただし、動詞体系全体についての両者の見方はかなり異なっている。

⁴⁹ たとえば、Fortson (2010: 98) をみられたい。

⁵⁰ リトアニア語の形式に付与されている下線部は acute 音節核を表わす。*védūo から vedù への変化は、いわゆる「語末の acute 音節核は短縮する」というレスキーンの法則によって説明される (cf. Leskien 1881)。

⁵¹ ゴート語の o は長母音である。

⁵² 先で述べるように、語幹形成母音をともなう能動態、中・受動態、完了という3つのカテ

*-h₂を再建する立場をとる García-Ramón (1985: 216) の考えでは、子音で終わる動詞語幹においては1次語尾 -μαι も2次語尾 -μᾶν も、以下のように音韻的に説明される。

-μαι < *-C-mai < *-C-mh₂-i
 -μᾶν < *-C-mām < *-C-mh₂-m⁵³

さらに筆者の考えでは、*-h₂という再建は1人称単数語尾と2人称・3人称単数語尾に含まれる母音の違いからも支持されるように思われる。印欧祖語に再建される中・受動態動詞の基本語尾は、1 sg. *-h₂e (> *-h₂a), 2 sg. *-th₂e (> *-th₂a), 3 sg. *-o であるが、能動態の1 sg. *-m, 2 sg. *-s, 3 sg. *-t からの形態的影響を考慮したうえで予想される形式は、1次語尾 -μαι, **-σαι, -τοι, 2次語尾 **-μᾶν, **-σα, -το となる。**でマークされた実際には現れない語尾のうち **-μᾶν については、*-h₂を建てれば実際の -μᾶν が導けることをうえてみた。問題は2人称単数の1次語尾 **-σαι, 2次語尾 **-σα である。当然のことながら、-(σ)οι, -σο は、**-σαι, **-σα がパラダイムの画一化によって3人称単数語尾 -το(i) に含まれる母音 o の影響を受けたものと理解される。この解釈をおし進めると、もし1人称単数に関して基本語尾が *-h₂でなく、*-h₂e であったとするなら、パラダイムの画一化によって2人称単数と同じ母音 o を持つ **-μοι, **-μῶν が予想される。しかし実際の形は **-μοι, **-μῶν ではなく、-μαι, -μᾶν である。したがって、1人称単数語尾には3人称単数語尾 *-o の影響を受ける母音が備わっていない *-h₂ という形式だったと考えることができる。

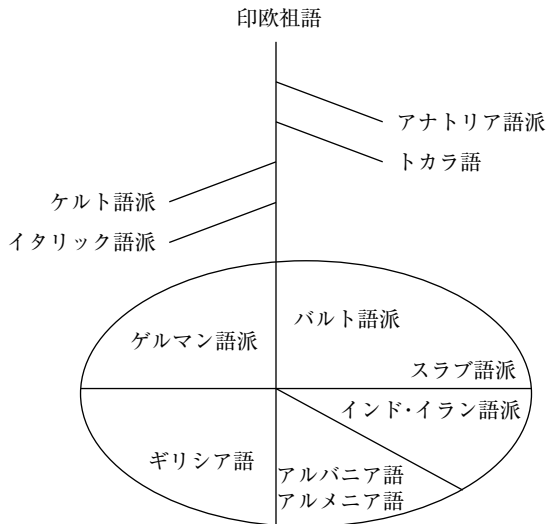
ただし、*-h₂を印欧祖語に再建し、ヒッタイト語の -(h)ḫa (< *-h₂e) を二次的につくられた形式とする García-Ramón の見方は受け入れることができない。確かに、García-Ramón (1985: 211–212) が主張するように、不規則な形式（この場合は *-h₂）には古い特徴が備わっていることが多いという傾向はよく知られている。しかしながら、印欧語の動詞体系を総体的にみると、中・受動態動詞語尾が語幹形成母音をともなう能動態語尾や完了語尾と顕著に類似しているということを近年の印欧語比較研究は明らかにしている⁵⁴。この知見のうえに立つならば、完了の1人数単数語尾が *-h₂e であるのだから、祖語に *-h₂e を再建し、後のある段階で語末母音脱落によって *-h₂ が生まれたと考えるほうが、はるかに蓋然性が高いように思える。

これに関連して、Villanueva Svensson (2002) は *-h₂ を *-h₂e から印欧祖語の時期に生じた語末母音脱落によって導こうとしている。しかしながら、ここで *-h₂ の再建によってより自然な説明が与えられる問題がどの言語にみられるかに注目したい。本節でみたように、ギリシア語中・受動態動詞2次語尾 -μᾶν (< *-C-mām

ゴリーが本来、類似した語尾によって特徴付けられていたという見方は近年有力になってきた。⁵³ いうまでもなく、語尾に含まれている m の要素は、語幹形成母音をともなわない能動態動詞（いわゆる athematic タイプ）1人称単数からの影響による。

⁵⁴ とりわけ、重要な研究として Watkins (1969) と Jasanoff (2003) をあげることができる。

< *-C- $\text{m}h_2$ -m), ゲルマン語派とバルト語派の語幹形成母音をともなう能動態動詞 (ゴート語 *baira* 'I bear' < *- o < *-o- h_2 , リトアニア語 *vedù* 'I lead' < **védūo* < **védō* < *-o- h_2) においては, *- h_2 という語尾の再建が支持される。さらに, サンスクリットの中・受動態動詞 2 次語尾 -i を, *- h_2 の規則的な母音化として解釈することが可能である (たとえば, *áduhi* 'milked' < *-C- h_2)⁵⁵。以上の例はギリシア語, ゲルマン語派, バルト語派, インド語派にみられるが, これらの言語はすべて, 近年有力になっている印欧諸語の分岐モデルの考え方にしたがうと, 祖語からアナトリア語派が, 続いてトカラ語, さらにケルト語派, イタリアック語派が離脱した後になおひとつの言語共同体としてまとまっていたグループに含まれている。



これに対して, アナトリア語派, トカラ語, ケルト語派, イタリアック語派には *- h_2 の再建を積極的に支持する根拠がみつからない。以上の分析から, *- h_2 は本来の語尾ではなく, 印欧祖語に遡らない時期に生じた語末母音脱落によって *- h_2e からもたらされたとするのが妥当と思われる。そしてギリシア語 - $\mu\bar{a}v$ は, この *- h_2 によって歴史的にもっともよく説明できると考えられる (- $\mu\bar{a}v$ < *-C- $m\bar{a}m$ < *-C- $\text{m}h_2$ -m)⁵⁶。

⁵⁵ 違った解釈が Cowgill (1968: 28) によって与えられている。彼は Peterson (1936: 162) にしたがって, サンスクリットの -i はつぎの類推の比例式によってもたらされたと考ええる。-mahe (1 人称複数 1 次語尾) : -e (1 人称単数 1 次語尾) = -mahi (1 人称複数 2 次語尾) : X (1 人称単数 2 次語尾)。X = -i。

⁵⁶ *- h_2e から *- h_2 へ語末母音脱落が生じた時期を特定化するうえで密接に関連してくる問題がある。それは 1 人称単数にみられる動詞語幹形成母音 *o の起源にかかわる問題である。筆者は, アクセントの後の閉音節にある *e は *o になるという Jasanoff (1998: 302note6) が提案

6. おわりに

ギリシア語 $-\mu\acute{\alpha}\nu$ 、ヒッタイト語 $-(h)ḫaḫat(i)$ 、リュキア語 $-\chi agā$ という 1 人称単数中・受動態過去語尾は一見したところ規則的に対応し、 $*-h_2eh_2e$ という祖形に遡るように思える。しかしながら本稿では、これらの 3 つがそれぞれの言語内部の歴史のなかで二次的につくられた形式であると主張した。その理由はつぎのとおりである。基本語尾 $*-h_2e$ が反復される形態変化は後期ヒッタイト語の時期に顕著にみられるが、反復語尾だけでなく非反復語尾もお存続しており、両者のあいだには機能的差異がない。もし印欧祖語やアナトリア祖語の時期に反復語尾がつくられていたとするなら、1 千年以上にわたって反復語尾と非反復語尾が自由変異の関係にあったことになる。このようなきわめて進行速度の遅い言語変化は非現実的である。

うえの 3 つの語尾のうち、ヒッタイト語の $-(h)ḫaḫa$ という反復語尾については、かなり正確なかたちでその先史を復元することができる。1 人称単数中・受動態過去語尾 $*-h_2e$ は、同じ語尾をとっていた 1 人称単数 $ḫi$ - 動詞過去語尾から形式的に区別される必要があったために、前ヒッタイト語の時期に反復されるようになった。反復語尾がまず過去形につくられたことは、リュキア語の反復語尾 $-\chi agā$ がやはり過去形であることから裏付けられる。反復語尾は後に現在形と命令形にも広がったが、後期ヒッタイト語の時期になっても非反復語尾を駆逐するまでには至っていない。また随意的に過去語尾に付与される $-ti$ が母音間で一貫してシングルで書かれている理由は、子音の弱化規則が前ヒッタイト語の時期になお作用していたことによる。これに対して、ギリシア語 $-\mu\acute{\alpha}\nu$ の成立に関しては語尾の反復は関与していない。語末母音脱落を受けた $*-h_2$ ($< *h_2e$) に対応する能動態語尾の影響が加わった $*-m_2-h_2-m$ ($> *mām$) から、おそらく音法則によって規則的に導かれたと考えられる。

本稿では、 $*-h_2eh_2e$ という祖形の再建が約 400 年にわたるヒッタイト語内部の歴史と相容れられないという根拠に基づいて、ギリシア語 $-\mu\acute{\alpha}\nu$ 、ヒッタイト語 $-(h)ḫaḫat(i)$ 、リュキア語 $-\chi agā$ が同源ではないこと、したがって $*-h_2eh_2e$ という祖形が幻想であることを主張した。ここでの分析は、新たなデータの追加やよりすぐれた解釈によってつねに改変されうるという祖語に内在する性格をよく例証してい

した音法則によって、この $*o$ は $*e$ から導かれると考えている ($*-e-h_2 > *-o-h_2$ 。くわしくは Yoshida 2009 を参照されたい)。そうするとこの音法則が適用される構造記述が満たされるには、その適用以前に $*-h_2e$ から $*-h_2$ という変化がすでに起こっていなければならない。その一方で見逃すことのできないのは、動詞語幹形成母音である $*e$ と $*o$ の交替がアナトリア諸語にはみられないが、他の語派にはみられるという事実である。したがって、 $*-h_2e$ が $*-h_2$ になったのはアナトリア語派が印欧祖語を離脱した後で、他のすべての語派がまだひとまとまりであった時期と想定できる。そして、この語末母音脱落が生じてから、動詞語幹形成母音 $*e$ が閉音節において $*o$ に変化したと考えられる。アクセントの後の閉音節に含まれる $*e$ が $*o$ になるという音法則を裏付ける根拠がアナトリア語派にみつからないことは、この見方の妥当性を示している。たとえば、印欧祖語に再建される $*nébhes$ 'cloud' が、ギリシア語では $\nuέφος$ であるのに対して、ヒッタイト語では $nēpīš$ であることに注目されたい。

るように思える。

もとより祖語の再建という目標に向けて、比較方法がきわめて重要な役割を果たすことはいうまでもない。そして、比較方法を適用するときには、祖語の特徴をできるだけ多く導き出したいという思いに駆られることもあるだろう。しかしながら同時に、比較方法には限界があるということ認識する必要がある。

参 照 文 献

- Adiego, Ignacio-J. (2001) Lenición y acento en protoanatolio. In: Onofrio Carruba and Wolfgang Meid (eds.) *Anatolisch und Indogermanisch. Akten des Kolloquiums der Indogermanischen Gesellschaft. Pavia, 22.-25. September 1998*, 11–18. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Chafe, Wallace L. (1959) Internal reconstruction in Seneca. *Language* 35: 477–495.
- Cowgill, Warren (1968) The first person singular medio-passive of Indo-Iranian. In: J. C. Heesterman, G. H. Schokker and V. I. Subramoniam (eds.) *Pratidānam: Indian, Iranian and Indo-European studies presented to Franciscus Bernardus Jacobus Kuiper*, 24–31. The Hague: Mouton.
- Eichner, Heiner (1969) Hethitisch *uešš- / uəššija-* “(Gewänder) tragen; anziehen; bekleiden”. *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 27: 5–45.
- Eichner, Heiner (1973) Die Etymologie von heth. *mēhur*. *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 31: 53–107.
- Fortson, Benjamin W. (2010) *Indo-European language and culture: An introduction*. Second edition. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Friedrich, Johannes (1960) *Hethitisches Elementarbuch I*. Zweite, verbesserte und erweiterte Auflage, Heidelberg: Carl Winter.
- García-Ramón, J. L. (1985) Die Sekundärendung der 1. Sg. Medii im Indogermanischen. In: Bernfried Schlerath (ed.) *Grammatische Kategorien · Funktion und Geschichte. Akten der VII. Fachtagung der Indogermanischen Gesellschaft, Berlin, 20.–25. Februar 1983*, 202–217. Wiesbaden: Reichert.
- Hajnal, Ivo. (1995) *Der lykische Vokalismus. Methode und Erkenntnisse der vergleichenden anatolischen Sprachwissenschaft, angewandt auf das Vokalsystem einer Kleincorpusprache*. Graz: Leykam.
- Heinhold-Krahmer, S., I. Hoffmann, A. Kammenhuber and G. Mauer (1979) *Probleme der Textdatierung in der Hethitologie*. Heidelberg: Carl Winter.
- Jasanoff, Jay H. (1998) The thematic conjugation revisited. In: Jay Jasanoff, H. Craig Melchert and Lisi Oliver (eds.) *Mír Curad: Studies in honor of Calvert Watkins*, 301–316. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Jasanoff, Jay H. (2003) *Hittite and the Indo-European verb*. Oxford: Oxford University Press.
- Joseph, Brian (1984) A note on assibilation in Hittite. *Die Sprache* 30: 1–15.
- Kloekhorst, Alwin (2008) *Etymological dictionary of the Hittite inherited lexicon*. Leiden: Brill.
- Kortlandt, Frederik (1981) 1st sg. middle *-H₂. *Indogermanische Forschungen* 86: 123–136.
- Kurylowicz, Jerzy (1947) La nature des procès dits “analogiques”. *Acta Linguistica* 5: 17–34. Reprinted In: Eric P. Hamp, Fred W. Householder, and Robert Austerlitz (eds.) (1966) *Readings in linguistics II*, 158–174. Chicago: University of Chicago Press.
- Leskien, August (1881) Die Quantitätsverhältnisse im Auslaut des Litauischen. *Archiv für slavische Philologie* 5: 188–190.
- LIV = Helmut Rix (ed.) (2001) *Lexikon der indogermanischen Verben*. Zweite Auflage. Wiesbaden: Reichert.
- Meillet, Antoine (1937) *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*. huitième édition. Paris: Hachette.
- Melchert, H. Craig (1984) *Studies in Hittite historical phonology*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Melchert, H. Craig (1992) The middle voice in Lycian. *Historische Sprachforschung* 105: 189–199.
- Melchert, H. Craig. (1994) *Anatolian historical phonology*. Amsterdam: Rodopi.
- Melchert, H. Craig. (2007) Luvian evidence for PIE *H₂seit- ‘take along; fetch’. *UCLA Indo-European*

Studies Bulletin 12(1): 1–3.

- Morpurgo Davies, Anna (1982/83) Dentals, rhotacism and verbal endings in the Luwian languages. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* 96: 245–270.
- Neu, Erich (1968a) *Interpretation der hethitischen mediopassiven Verbalformen*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Neu, Erich (1968b) *Das hethitische Mediopassiv und seine indogermanischen Grundlagen*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Oettinger, Norbert (1979) *Die Stammbildung des hethitischen Verbuns*. Nürnberg: Verlag Hans Carl.
- Oettinger, Norbert (1997) Die Partikel -z des Hethitischen (mit einem Exkurs zu den Medialformen auf -t, -ti). In: Emilio Grespo and José Luis García Ramón (eds.) *Berthold Delbrück y la sintaxis indoeuropea hoy (Actas del Coloquio de la Indogermanische Gesellschaft, Madrid, 21–24 de septiembre de 1994)*, 407–420. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Oshiro, Terumasa (1993) Notes on Hieroglyphic Luwian. *Orient* 29: 45–56.
- Pedersen, Holger (1938) *Hittitisch und die anderen indoeuropäischen Sprachen*. København: Levin & Munksgaard.
- Peterson, Walter (1936) The Personal endings of the middle voice. *Language* 12: 157–174.
- Pinault, Georges-Jean (2008) *Chrestomathie tokharienne*. Leuven-Paris: Peeters.
- Puhvel, Jaan (1991) *Hittite etymological dictionary*. Vol. 3. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Rieken, Elisabeth (2004) Das Präteritum des Medio-Passivs im Hieroglyphen-Luwischen. *Historische Sprachforschung* 117: 179–188.
- Villanueva Svensson, Miguel (2002) A Proto-Indo-European apocope *-oHe > *-oH and related morphological problems. *Indogermanische Forschungen* 107: 106–123.
- Villanueva Svensson, Miguel (2009) Sobre la 1ª persona de singular del pretérito medio hitita -bbabat(i), licio -xagā. *Aula Orientalis* 27: 279–284.
- Watkins, Calvert (1969) *Indogermanische Grammatik* III/1: *Geschichte der indogermanischen Verbalflexion*. Heidelberg: Carl Winter.
- Watkins, Calvert (1994) Il proto-indoeuropeo. In: Anna Giacalone Ramat e Paolo Ramat (eds.) *Le lingue indoeuropee*, 45–93. Bologna: Società editrice il Mulino.
- Weiss, Michael (2009) *Outline of the historical and comparative grammar of Latin*. Ann Arbor: Beech Stave Press.
- Yakubovich, Ilya (2009) *Sociolinguistics of the Luwian language*. Leiden: Brill.
- Yoshida, Kazuhiko (1987) The present mediopassive endings -tati and -uāštati in Hittite. *Die Sprache* 33: 29–33.
- Yoshida, Kazuhiko (1990) *The Hittite mediopassive endings in -ri*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Yoshida, Kazuhiko (2001a) Hittite nu-za and related spellings. In: Gernot Wilhelm (ed.) *Actes des IV. Internationalen Kongresses für Hethitologie (Würzburg, 4.–8. October 1999)*, 721–729. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Yoshida, Kazuhiko (2001b) On the prehistory of the Hittite particle -ti. *Indogermanische Forschungen* 106: 84–93.
- Yoshida, Kazuhiko (2007) The morphological history of Hittite mediopassive verbs. In: Alan Nussbaum (ed.) *Verba Docenti: Studies in historical and Indo-European linguistics presented to Jay H. Jasanoff by students, colleagues, and friends*, 379–395. Ann Arbor: Beech Stave Press.
- Yoshida, Kazuhiko (2009) On the origin of thematic vowels in Indo-European verbs. In: Kazuhiko Yoshida and Brent Vine (eds.) *East and west: Papers in Indo-European studies*, 265–280. Bremen: Hempen Verlag.
- Yoshida, Kazuhiko (2010) 1st singular iterated mediopassive endings in Anatolian. In: Stephanie W. Jamison, H. Craig Melchert and Brent Vine (eds.) *Proceedings of the 21st Annual UCLA Indo-European Conference*, 231–243. Bremen: Hempen Verlag.
- Yoshida, Kazuhiko (2011) Proto-Anatolian as a mora-based language. *Transactions of the Philological Society* 109/1: 92–108.

執筆者連絡先：
606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学大学院文学研究科
kyoshida@bun.kyoto-u.ac.jp

[受領日 2011年3月31日
最終原稿受理日 2011年5月12日]

Abstract

The Mirage of Correspondence in Comparative Linguistics: Greek $-\mu\bar{\alpha}v$, Hittite $-(h)hahat(i)$ and Lycian $-\chi ag\bar{a}$

KAZUHIKO YOSHIDA
Kyoto University

The 1 sg. mediopassive endings, Greek $-\mu\bar{\alpha}v$ (non-Attic-Ionic), Hittite $-(h)hahat(i)$ and Lycian $-\chi ag\bar{a}$ at first glance seem to show an undeniable correspondence in terms of form and meaning, going back to the Proto-Indo-European iterated ending $*-b_2eb_2e$. However, a close examination of the iterated ending $-(h)haha$ and uniterated ending $-(h)ha$ within the history of the Hittite language shows that Greek $-\mu\bar{\alpha}v$, Hittite $-(h)hahat(i)$ and Lycian $-\chi ag\bar{a}$ are independent developments in the prehistory of each language. Neo-Hittite historical texts still have the uniterated endings as well as the iterated endings. From a functional point of view, there is no discernible opposition between them. If we assume that Proto-Indo-European or Proto-Anatolian had the iterated ending available, it would turn out that $*-b_2e$ and $*-b_2eb_2e$ remained functionally undistinguished from a Proto-Indo-European or Proto-Anatolian stage to the Neo-Hittite period. Having two free variants coexisting over such a long period does not seem likely. Needless to say, the comparative method is a powerful tool for reconstructing proto-languages, and there is a constant temptation when practicing the comparative method to attribute too much to the common ancestor, but it is important to recognize its limitations.